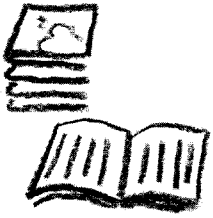
特集　緑陰図書紹介

『永遠のなかに生きる』を読んで

大畠孝子



著者は、生命科学者として歩む中、一九六九年、原因不明の難病となり、闘病生活の中で、サイエンスライターとして著作活動を続けておられる柳澤桂子さんです。毎月決まって起きる激しい嘔吐などにより、一週間は起き上がることもできず、難病とわかるまでには、自分を責め続けたこともあったということです。その闘病をテーマにしたテレビのドキュメンタリー番組の中で、苦しさの中でも美しく生活しているありように、尊敬の念を抱きました。

特に印象に残っているのは、「闘病生活の中で、台所に立ち、食器を洗い、かごの中にどのように置いていくかを考える営みに幸せを感じる」ということを語られた場面でした。私たちは、日ごろ健康に暮らしている時には、日常の中にたくさん埋もれている幸せに気づくことができません。このことは、子どもたちと共に保育の現場で生活している大人たちが、日常の中での事象について、子どもたちと喜び、共感することがたくさんあるということを思い出させてくれました。

さて、著者は、これまでたくさんの文章を書き、

読者から戻ってくる愛読者カードを通して、そこから学び、生命科学についてのメッセージをよりわかりやすく発信し続けています。

著作の中から『永遠のなかに生きる』（柳澤桂子著　集英社　二〇〇六年）を選んでみました。保育につながる視点で読んでいくと、何か心が広がり、神聖な気持ちになりました。三つの視点から、本書の内容を見ていくことにします。

まず、一つには、「**子どもたち一人一人のかけがえのないいのちについて**」です。著者は、「生命の歴史は死の歴史」であると解き明かしています。そして地球上に生命が誕生して、生き残っている生物種はごく一部であると語っています。原核生物、寄生生物の中に見る能動的な死、やがて、光合成をする生物が現れ、地球上の酸素が増え、酸素を使って効率よくエネルギーを獲得する細菌が出現して、その細菌と共生した細胞から、人間は生まれたと考えられているそうです。そして、生命の誕生後現れた真核生物から、人間は進化してきており、その後、多細胞の生物が生まれ、細胞間での役割分担が行われ、生殖細胞と体細胞が分化し、体細胞の行きつくところは死であるとつなげています。

「私たちの個体の寿命は、受精の瞬間から時を刻みはじめます。産声をあげる一〇カ月も前から、私たちは死に向けてすでに歩みはじめるのです。しかし、その歩みは、はじめから崩壊に向かっているのではありません。一個の受精卵は六〇兆個の細胞に増え、人間という小さな宇宙を形成していきます。

脳が発達すると喜怒哀楽を感じ、考え、学習をします。自意識と無の概念は死へのおそれを生みますが、死への歩みは、成熟、完成へと向かう歩みでもあります。一〇〇年に満たない死への歩みの中には、自分自身を高める余地が残されていま

す」（四十八頁）

「生命の歴史の中では、生と死はおなじ価値をもっています。（中略）生命の歴史の中に編み込まれた死を避けることはできないし、それを避けてはならないものです。（中略）死を否定することは生をも否定することになります」（五十頁）

保育にかかわる大人たちは、一人ひとりの子どもたちの命の尊さをとらえ、かかわっていかなければなりません。そのありようが、いのちの教育にもつながっていくものと考えてもよいのではないでしょうか。さらに、著者は次のように述べています。

「いのちには四〇億年の歴史の重みがあり、一〇〇年の意識の重みがあるのです。その人を取り巻く多くの人々によって共有されるものでもあります。死は生命の歴史とともに、民族の歴史、家系の歴史、家族の歴史、個人の歴史すべてを包含するものです」（五十四頁）

二点目は、「感動することの大切さ」です。日常生活の中で「驚くことの大切さ」といってもよいでしょう。著者は、「感動の大切さ」の中で、中学一年生ぐらいのときに伯母様より愛読した本をいただき、抱きしめたいほど素晴らしい贈り物であったと書いています。偶然にも、著者自身が愛読していた「若草物語」の本と同じ内容の「四人姉妹」という本であったのですが、伯母様の愛読した本であることがうれしかったと書かれています。著者にとって伯母様はあこがれの人であったということです。

「戦後で、若草物語のようなぜいたくはできなかったのですが、三女のエーミーが洗濯物をきちんと畳んで、きれいにタンスの引き出しに入れるなどというようなところは、すぐにまねをして、タンスの中を整理しました（中略）人は愛情あふれる物語や哀しい話に感動し涙します。人間味あふれる事柄に温かさを感じ、心地よさをおぼえま

す。時代や人種を超えて残る文学や映画はわれわれ人類の文化的財産といえるでしょう。感動は私たちの人生を豊かにしてくれます」（百十四～五頁）と結んでいます。

三点目は、「人へのかかわりに喜びを感じることの大切さ」です。「慈悲の遺伝子」というテーマで書かれた文の中で、

「人類は他の人のために尽くすことに喜びを感じ、そのような行いを善とする性格傾向ももっていると私は信じています（中略）私が病気で動けなくなったときに、一番辛かったことは、人になにかをしてあげられないことでした。逆にいえば、人になにかをしてあげて、喜ばれることがなによりもうれしいということです。この喜びは、私だけにとどまらず、多くの人に共通しています（中略）私たちは、自己中心性を超越して、他人のために尽くすことに喜びを感じるよう成熟しつつあるものだ」（百三十四～五頁）と述懐しています。

本書は、著者の大好きな日本画家福井爽人氏の、二十二枚の絵を入れて編集されています。著者が本書の「音楽と文字」の中で「一冊の本もまたページとページの間にたくさんの感情を含んでいます」と書かれているように、そのことを、目に見える形で実践したといえるでしょう。あとがきには、

「皆様に少しでも楽しく読んでいただくために、この本にたくさんの絵を入れたいと思いました。きれいな絵で飾ったら、どんなにすてきだろうと考えました」とありました。

本書は、今保育者に必要とされる「大きな宇宙の視点」と「人間の生命の尊厳へのまなざし」そして「日常の生活の中に主題を見つけること」を思い起こさせてくれると考えます。

（茨城キリスト教大学教授）